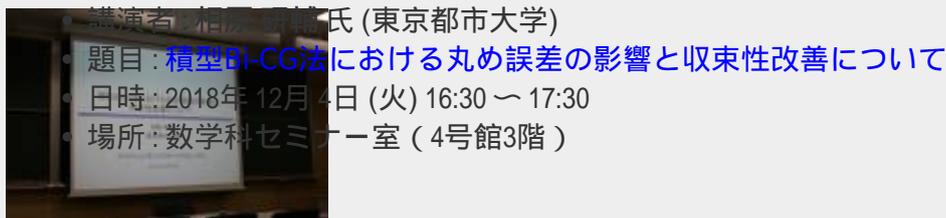


第14回 相原 研輔



seminar, 2018

abstract

大規模連立一次方程式に対して、クリロフ部分空間法（線形部分空間を広げながら解を探索する反復法群）は有効な数値解法である。その一種である積型Bi-CG法は、近似解などを短い漸化式によって更新することから、反復毎の計算量やメモリ使用量が少なく済む効率的な方法である。しかし、計算機上に実装した際に生じる丸め誤差の影響によって、理論通りに収束しないことも多い。本講演では、積型Bi-CG法の導出について概説した上で、丸め誤差が収束性に与える影響を考察する。また、収束性を改善するためのひとつの手法として、最近講演者らが提案した残差スムージングの改良についても紹介したい。



.lg-outer.lg-pull-caption-up.lg-thumb-open .lg-sub-html {bottom:80px;}

12 images

From:

<https://wiki.ma.noda.tus.ac.jp/> - (旧)理工学部 数学科

Permanent link:

<https://wiki.ma.noda.tus.ac.jp/seminar/2018/014>

Last update: **2021/02/11 11:09**

